

ベルクソン『創造的進化』
終局部分における「二種の思い込み」批判と「否定」の捻じれ
——認識論と存在論における原-知性の喪失と身体性

宮 崎 隆

La critique bergsonienne contre les « deux illusions » et le sens de la torsion de la
« négation » dans la dernière partie de *L'Évolution créatrice*

Takashi MIYAZAKI

横浜国立大学教育人間科学部紀要Ⅱ（人文科学）No.17 別冊

Reprinted from
THE HUMANITIES
Journal of the College of Education and Human Sciences
Yokohama National University
No.17, FEBRUARY, 2015

ベルクソン『創造的進化』終局部分における「二種の思い込み」批判と「否定」の捻じれ

——認識論と存在論における原一知性の喪失と身体性

宮崎 隆

『創造的進化』の終局部分たる第三章後半以降は、それまでに確立した自らの哲学を前提としつつ、ベルクソンの挑む論戦からなる。第四章冒頭に明示されているように、「理論上の二種の思い込み *deux illusions théoriques*」(EC, 272)⁽¹⁾に対する批判である。小論ではそれを少し観戦してみたい。

その論戦においてそもそも何が問題になっているのか。「秩序 *ordre*」に対する「無秩序 *désordre*」にせよ、「充実」に対する「空虚」や「無」にせよ、あるいは「運動 *le mouvement*」に対する「不動なもの *l'immobile*」「不安定なもの」に対する「安定したもの」にせよ、肯定・否定の関係をベルクソンは問題として挙げる (cf. EC, 273-5)。論戦は否定を理解する仕方に関わる。「否定的観念の内容 *un contenu d'une idée négative* はいかに規定し難いか」(EC, 222)とベルクソンは吐露する。この困難のゆえに、哲学的な「理論上の二種の思い込み」が生じる。「運動するものへと到るために、われわれが不動のものを通過するように、われわれは充実したものを思惟するために、空虚を利用する」(下記の引用A)。第一の「思い込み」によれば、不動から運動へと到ることができる。第二の「思い込み」によれば、充実の思惟は空虚を起点とする。存在論上のものと認識論上のものと解される。「二種の思い込み」はともに、否定を理解する仕方の間違いであり、そこから問いの立て方の間違いが導かれる。哲学的な「思い込み」から生じる「諸帰結」の一つである (EC, 272)。たとえば、「何ゆえ、またいかにして事物なるもの〔たゞる実在性〕 *réalité* は秩序に服するのか」(EC, 221)⁽²⁾とつう問いを立てるなら、

そのように問うことそのことが間違っているのである。そうした問いが立つのは、「いかなる種類の秩序も不在だということが有りうる、ないし概念的に思い抱きうるようにみえる」(ibid.)がゆえである。問いにおいてすでに「無秩序の観念 *l'idée de désordre*」が、「秩序」の否定たる「否定的観念」が前提されてしまっている。「偽問題 *pseudo-problème*」(EC, 222)である。というのも、複数の秩序の元に「共通の基体 *substrat commun*」(EC, 223)など——想定上として——存在しないからである。当の「観念の内容」は空疎である。しかるに知性は「基体」を想定せずにおかない。アリストテレスの「質料」も、カントの「感性の雑多」も、「基体」に対して与えられた「哲学者なるもの *le philosophe*」(下記の引用C)の単なる表現にすぎない。同じ穴の貉である。實在説 *réalisme*——アリストテレスの主張する「形相」の在り処は客観の側の実在である——と観念説 *idéisme*——カントの主張する「形式」の在り処は主観の側の観念である——は一網打尽にされる。「認識論 *théorie de la connaissance*」において両者は、一つの同じ間違った——「基体」の存在を前提とする——問いに関する答えの相違にすぎない (EC, 221, 233)と。

しかるにベルクソン自身の説にも否定が見出される。「物質の秩序 *l'ordre physique*」(あるいは「数学の秩序 *l'ordre mathématique*」ないし「幾何学の秩序 *l'ordre géométrique*」) (EC, 218, 220-1, 226, 228, 231-2, 236-7, 320, 329, etc.) がそれである。なるほどベルクソンによれば「本体の実在性 *réalité*」は、はじめから「秩序」づけられている。ただし肯定的・否定的に。二元説である。

それはまた「精神 l'esprit」あるいは「生 la vie」と「物質 la matière」との二元説でもある。今度は存在論において、一元説たる唯物説 matérialisme と唯心説 spiritualisme とが一網打尽にされる (cf. EC, 241, 268)。ところが二元説たるだけに、われわれ脊椎動物に関して、以下のとき捻じれが確認される。たとえば『創造的進化』第二章の記述によれば、ベルクソンの自説にあつては、「認識論」と「形而上学」とは平行しているように見える。認識機能とその対象たる存在との間に見られる——一方には「直観 l'intuition」と「生」⁽¹⁾、他方には「知性 l'intelligence」と「物質」という——平行する二組である。

「認識の問題は……形而上学上の問題とまさしく一つであり、しかもその際、両問題はいずれも経験に帰属する」と。たしかに、外部の実践 pratique の領野に存する物質は、知性によってしか認識されず、直観には現前しない。逆に、内面の思弁 spéculation の領野に存する生は形而上学的経験たる直観にしか与えられない。しかも一方で、認識機能については、原意識とも呼ぶべき進化初期の原初の動物たる原動物の「意識は、直観と知性とに分化した」(EC, 179)⁽²⁾。「直観と知性とは、意識の働きの相反する二つの方面を表している」(EC, 267)。他方で、直観と知性への「意識の二分化のほうは」、認識されるべき存在たる「実在する本体の二つの形式 la double forme du réel に起因する」(EC, 179-80)。しかるに、もし二つの組が平行するなら、逆に物質は——仮定上、外部の実践の領野に属すのだから——「実在する本体の二つの形式」の一方ではありえず、そうなれば二元説の根底が崩壊する。理由はこうだ。「実在する本体」は内面の思弁の領野にのみ属す。思弁と実践とを覆うベルクソン存在論において、仮象ならぬ存在は形而上学の、思弁の領野においてのみ存立する。仮象のほうは実践の領野において存立する。実践の領野は認識対象の在り処でしかない。われわれ脊椎動物の知性は実践的な認識機能であり、その対象は「行為 action」のための仮象にすぎない。いっ

そう精確に言うなら、実践の領野の認識機能が知性なのではなくて、後述するように、脊椎動物の知性がそうした実践の領野を開く。したがって、「実在する本体」は原理上、外部の実践の領野には現出しない。「実在する本体」を脊椎動物の知性は認識することができない。かくして、知性の認識対象であるかぎりにおいて、物質は「実在する本体」を構成しない。認識機能と存在との間に捻じれが生じている。「実在する本体の二つの形式」たる形而上学における二元の一方が物質を意味している以上、物質も、少なくともいささかは「本体の実在性 la réalité」に与しており、その限りで、知性ではなくて、直観に現出する。認識機能とその対象たる存在とは平行しない(精確には、内面の直観において認識されるのは「対象 objet」ではないが)。ではいかに現出するのか。

答えは「否定」の二義性に存する。捻じれはこの二義性に対応している。脊椎動物の物質認識に関わる「否定」の捻じれである。『創造的進化』第三章に戻ろう。ベルクソンによれば、「諸事物の数学の秩序は、無秩序の征服であるがゆえに事象的・肯定的 positif な本体の実在性を有している」と⁽³⁾いう考えは、無秩序が在りつうという考えと同様に、間違っている(EC, 221)。「物質の秩序」あるいは「幾何学の秩序」、「数学の秩序」は、「生の秩序」が「事象的・肯定的」であるのに対して、「否定的」である。してみるとベルクソンが目指しているのは、「否定的観念」を単に断罪することではない。そうではなくて、断罪すべきは無秩序と秩序という組、すなわち、秩序の否定とそれに対する肯定的事象たる物質という組である。ベルクソンの批判は、「無秩序」説が同時に、「物質性 matérialité」は「事象的・肯定的」だと主張している点に向けられている。問題なのは「否定的観念」ではなくて、「事象的・肯定的」と一組になって構成されているその「内容」規定なのである。当の観念の「内容」が空虚か否かだけではない。ベルクソンは吐露していた。「否

定的観念の内容は、いかに規定し難いか」と。「物質の秩序」は「肯定的」ではない。が、そうかといって〈秩序の否定〉でもない。そのいずれでもなく、〈否定の秩序〉である。内面の「物質性」は〈否定の秩序〉としてわれわれ脊椎動物に現出する。そしてその認識は「否定的観念」を対象とする空なる直観——否定的直観——による。「肯定の秩序」でない」という直観的な認識である。認識機能と存在とは平行でないばかりか今度は、内面の「物質性」の認識に関して、肯定的に交差もしない。捻じれである。〈秩序の否定〉は、否定であるかぎり秩序としては何ものでもない。「無秩序」であり、「空虚」や「無」の仲間である。その際、同時に物質世界は、そうした〈秩序の否定〉に対する肯定的事象とみなされることになる。これに対して、〈否定の秩序〉は、秩序の一種であり、事象的な何ものかである。「物質性」たる何か知れぬものが内面の直観に現出している。「物質性」は内面における他性の表現たりうる。「張り緩み」である。同時に「数学の秩序」のほうが、仮象的かつ否定的となる。知性の認識対象である。すなわち、〈否定の秩序〉という否定的な系列において認識される物質は、事象的な内面の「物質性」から仮象的な外部の「数学」へと移行する。それに応じて、認識機能のほうは、内面の否定的直観から外部の認識機能たる知性へと移る。「物質性」は、内面の思弁の領野において肯定的な「生」と共に、ただし否定的に「実在する本体」を構成している (cf. EC, 231)。二元説である。

こうしたベルクソンの批判の前提になっている『創造的進化』の基本構図を粗描しておく。進化は主に四つの階梯に区別される。「生」あるいは「精神性 la spiritualité」と「物質性」あるいは「知性性 l'intellectualité」が、ベルクソン二元説の根底であり (EC, 202)、第一階梯をなす。脊椎動物によるなら、事象的な〈肯定の秩序〉と〈否定の秩序〉である。両者の一体化によって、心身関係が発生する。第二階梯である。「実在する本体」が構成される。心

身関係において「張り緊め tension / tendre」は生の、「張り緩み détente / détendre」は物質性の規定である。「張り緊め」と「張り緩み」との対立関係は、「縮約 contraction / contracter」と「弛緩 relâchement / relâcher」との対立関係であり、「上昇 montée / monter」と「下降 descente / descendre」 (EC, 11, 246, 267, 269, etc.) と二方向の、「浮上 élévation / élever」と「落下 tombée / tomber」 (EC, 246-8, 267, etc.) という方向の対立関係によって表現される。それは、内面の領野におけるかぎりでの内面化と外部化という二方向の流れである。発生したばかりの生—物たる原初の動物は「運動性 mobilité」の、時間性の階梯に属す。生ける時間である。「運動性」は、相反する二方向の流れの一体化から成る。これに対して第三階梯において、われわれ脊椎動物は節足動物と分岐した（それゆえ『創造的進化』読解の際、「われわれ」の語には注意が必要である。筆者による謙譲の二人称複数とは別に、「われわれ」人間たる脊椎動物ないし高等脊椎動物を、なかならず「節足動物」と対置しつつ、意味している場合も散見される）。脊椎動物に特有な第三階梯・第四階梯は知性とその認識対象たる「不動性 immobilité」の、「空間性 spatiale」の階梯である。ベルクソンは思弁の領野たる第二階梯から、実践の領野たる第三階梯・第四階梯の発生——「生成 devenir」たる「進化発達 évolution」——を辿る。ちなみに『物質と記憶』は、われわれの認識を大きく四つの水準に区別していた。⁽⁶⁾『創造的進化』における四階梯は、この四水準にはほぼ対応する。ことに第三階梯・第四階梯については、当然のことながら、『物質と記憶』の第三水準・第四水準と重複する (cf. EC, 262)。『物質と記憶』の記述は——特別の断りも配慮もなしにはあるが——われわれ脊椎動物の認識を扱っていたのだから。⁽⁷⁾

そしてベルクソンの批判の要をなすのは、第三章前半 (EC, 187-220) において確立された第二階梯の身体性——われわれにおける内面の物質性の規

定——である。「物質 *matière*」の本質たる「物質性」が内面における身体性として、時間的な規定たる「張り緊め」に対する「張り緩み」として解明され、思弁の領野において、そうした「相反する二方向・二方面 *deux sens opposés*・*deux directions opposées*」(EC, 224, 267, cf. 238-9, 246, 248)の「流動・流れ *flux*・*courant*」(EC, 187, 250-1, etc.)の一体化による生物の「発生 *la genèse*」という説が確立される⁽⁸⁾。なかでも「張り緩み」たる〈否定の秩序〉の説は、『創造的進化』独自のものである。『物質と記憶』には見当たらない。してみると、『創造的進化』の終局部分において「否定的觀念の内容」規定をめぐってベルクソンが論戦を展開するのは、自説を哲学史上の既存の物質概念に対質せしめ、それによって身体性を闡明するためでもある。否定の理解の仕方に関するベルクソン哲学の独自性は、「張り緩み」という否定的なその身体の規定に依拠している。小論では、その論戦において提示されている認識論と存在論とを概観しつつ、ベルクソンの自説を探り出し、その独自の身体性の含意するところをいささかなりとも解明してみたい。そのためにまず「二種の思い込み」を確認し、その後それぞれの「思い込み」を個別に少し検討する。その際四つのパート——第三章後半の第一パート (EC, 220-238)と第二パート (EC, 238-271)、ならびにそのそれぞれに対応する第四章前半の第一パート (EC, 273-298)と第二パート (EC, 298-307)——に区分して考察を進める。二つの第一パートでは認識論上の問題が、二つの第二パートでは存在論上の問題が主に扱われている⁽⁹⁾。

一、「二種の思い込み」および真の思弁と似非思弁——認識論上の問題と存在論上の問題ならびに「物質性」認識の陥穽

『創造的進化』第四章冒頭によれば、第四章前半とそれ以前の考察は「二種の思い込み」の「端緒 *le principe*」とその「諸帰結 *les conséquences*」を主たる対象にしている (EC, 272)。「他の様々な哲学と対置しつつ、一つの哲学をいっそう明確に規定する」(EC, 272)ための考察である。「二種の思い込み」は「近親関係」にあつて「同じ起源を有している」(下記の引用A)。単数定冠詞で示されているように、「端緒」は一つである。或る「一つの哲学」であり、ただ「一つの哲学」でもある自説を提示し、他の「哲学なるもの *la philosophie*」(EC, 222)を一網打尽にしようというわけである。自説は「本体の実在性という織地そのものを持続と見て取る一つの哲学」(EC, 272)であり、「哲学なるものは」はいずれも、実践の領野に在って、思弁の領野には届いていない、と。

いささか長くなるが、「二種の思い込み」に関する第四章冒頭の記述を引用しよう。小論はその全体がこの引用の解釈でもある。

「物質にせよ精神にせよ、〔これまでの分析において〕本体の実在性は永続する生成としてわれわれに現出 *apparaître* してきた。本体の実在性は、自己形成 *se faire* しつつあるにせよ、自己壊脱 *se défaire* しつつあるにせよ、しかしけっして何か形成されてしまっているものではない。われわれが、自らの意識と自分との間に置かれた幕を取り除く *nous écartons le voile qui s'interpose entre notre conscience et nous* とときに精神について有する直観は、そうしたものである。こうしたことを同様

に知性と諸感覚のほうも、物質について、もし無媒介で利害関心を脱したその再現表象 *une représentation immédiate et désintéressée* を手に入れるなどということになるならば、われわれに明示することになるだろう。しかし知性は、何よりも行為の諸々の必要 *les nécessités* に係

ずらっているので、諸感覚と同様、物質の生成に関して、瞬間の、まさにそのゆえに不動の様々な視「られた」像 *des vues instantanées et : immobiles* を飛び飛びに捉えるに留まる。意識はそうなると今度は知性に則って律せられ、内面の生いのちに関しては、すでに形成されてしまっているものに眼差しを向け、それで生が自己形成しつつあることは漠としてしか感取しな^い *ne la (= la vie) sentir que confusément se faire*。かようにして、われわれに利害関心のある諸々の時間契機が持続から離脱してくる *se détachent de la durée les moments qui nous intéressent*。われわれは、この諸々の時間契機を持続の流路に沿って「諸々の瞬時 *les moments* として」拾い集めたのである。われわれが把持しているのはもっぱらこうした諸々の瞬時である。それに唯一懸案のものが行為たるかぎり、そうするのには理がある。しかし、実在する本体の自然本性について思弁するに際して、われわれの実践的な利害関心が眼差しを向けるよう要求するとおりにわれわれが、相変わらず当の本体に対して眼差しを向けている間われわれは、真の進化発達 *l'évolution vraie* を、根源の生成 *le devenir radical* を見て取る力量を有しないことになる。生成については様々な状態のみを、持続については様々な瞬間のみを認知する。つまり持続や生成という言葉を使う場合でさえ、われわれが考えているのは別のものである。われわれが吟味せんとしている二種の思い込みのうち、印象深いほうはこうしたものである。その思い込みの信じる場所では、安定したものを介して不安定なものを、不動なものを介して運動するものを思惟することができるということになる。

他方の「第二の」思い込みは第一のものと近親関係にある。同じ起源を有している。こちらでもまたわれわれが、実践向きに出来ている手法を思弁へと移し入れることから来る。いかなる行為の目差すところも、自

らに欠けていると感取している対象を手に入れることに、ないしはまだ現存していない何ものかを創り出すことにある。そうした極めて特異な意味方向において、行為は空虚を埋めて、空虚から充実へ、不在から現「に」在「る」こと」へ *d'une absence à une présence*、非事物的なもの「たる非実在」から事物的なもの「たる実在」へと進む *aller ... de l'irréel au réel*^⑤。もともとその際に問題になっていく非事物なるもの *l'irréalité* とは、「本体の実在性 *la réalité* の否定ではなくて」われわれの張り向きの注意が進み行った方面 *la direction où s'est engagée notre attention* にもっぱら準じている。なぜそのように言うかといえば、われわれは某かの本体の実在性のうちに浸り込んでおり、そこから立ち出せることはできないが、ただし、現「に」在「る」本体の実在性 *la réalité présente* がもしわれわれの求めていたものでないなら、前者「『本体の実在性』のその現「に」在「る」こと」をまざまざと確認しているその場所において後者「『われわれの求めていた事物なるもの』の不在を語るからである。かくしてわれわれは、自らの有しているものを、自分の手に入れたものの関数として表現 *exprimer* する。行為の領野においては、これほど合法的なことはない。しかしわれわれは……諸々の事物の本性に関して、当の諸事物がわれわれに対して有する利害関係から独立に思弁する際も、こうした語り方を、かくしてこうした考え方を保持する。……この思い込みも、第一の思い込みと同様に、変化のない習慣に起因する。われわれの知性は、諸々の事物に、対する、われわれの、行為を、準備する、*elle (= notre intelligence) prépare notre action sur les choses* 際、そうした習慣に染まっているのである。運動するものへと到るために、われわれが不動のものを通過するように、われわれは充実したものを思惟するために、空虚を利用する」(EC.272.4) - 引用 A

捻じれが垣間見える。一方で精神あるいは生^{いのち}という内面において認識されるものに関しては、直観という意識の内面向けの認識機能が在る。他方で物質という外部の認識対象に関しては、知性という意識の外部向けの認識機能が在る。意識には二種の働きがあり、直観から知性へと移る。直観による外部認識は問題になっていない。しかるに知性による内面の認識の不可能性のほうは、反実仮想の文を用いてわざわざ指摘されている。精神に関する直観と「同様に知性と諸感覚のほうも、物質について、もし無媒介で利害関心を脱したその再現表象を手に入れるなどということになるならば *s'its* [= *l'intelligence et les sens*] *en obtenaient*」と。そもそも内面向けの無媒介の直観という認識機能が在るのに、何ゆえ「同様に」知性認識が問題にされるのか。「無媒介で利害関心を脱した」内面の思弁的な認識が、「事象的・肯定的」な認識が「物質について」求められているからである。しかもその失敗は明らかである。「物質について」の思弁的な「肯定的」認識という課題が、われわれ脊椎動物にとっては矛盾を孕んでいるからである。引用Aは、その全体がこの失敗の理由提示でもある。認識対象が「物質」であれば、それを「事象的・肯定的」に認識する本来の候補者は「知性と諸感覚」である。しかるに進化した脊椎動物たる現在の「われわれ」にあつては、「知性と諸感覚」は「実践向きに出来ている」。かくして内面の物質性を「事象的・肯定的」に認識する術^{すべ}をわれわれは有していない。認識されるのはせいぜい「張り緩み」という「否定の秩序」にすぎない。「否定的観念」である。「二種の思い込み」が生じる所以である。引用Aに沿ってその経緯を見ておこう。

「二種の思い込み」に共通する「端緒」たるその「同じ起源」は、極めて単純である。すなわち、「われわれ」[脊椎動物]が、実践向きに出来ている手法を思弁へと移し入れる^いと」に存する (cf. EC, 156)。「哲学なるもの」

はすべて実践の領野を基盤にしており、「利害関係から独立に思弁する際も」実は、その「語り方」と「考え方を保持」している。似非思弁である。知性の哲学にすぎない。実践と対立するベルクソンの真の思弁に対して、似非思弁とは無自覚なまま為された実践の理論化、哲学化にほかならない (EC, 296-7)。その理論化の際に一種の屈折が生じる。それを自覚にもたらずのは、進化説以外にはありえないだろう。真の思弁は進化説によつてもたらされる。哲学者ベルクソンが進化説を扱う理由の一つであろう。では、似非思弁と真の思弁は、如何なる在り方をしているのか。また、その対象は何処に在るのか。引用Aの第一段落は認識を論じながらも、主に存在論に関わる。存在としてまず「精神」と「物質」という存在論上の二元が提示される。「生^{いのち}」と「物質性」という「二つの始元」(EC, 180) からなる始源の形而上学 (第一階梯) である。続いて「永続する生成」——「自己形成」と「自己壊脱」——からなる「本体の実在性」が提示される。「根元の生成」であり、「真の進化発達」である。第二階梯に在るのは生物たる「生ける物質」(EC, 141, 23, 30, 71, 94) であり、こちらは「われわれに現出」している。「精神」たる「自己形成」の働きは、この場合「内面の生^{いのち}」に等しい。生^{いのち}は常に「自己形成しつつある」。これに対して「自己壊脱しつつある」とは、内面の「物質性」のほうの規定である。かくしてベルクソン認識説に関しては、この二元からなる生^{いのち}物たる「自分」についての「内面」の形而上学的経験が、そうした「自らの意識」——思弁的な原意識——が、内面の「直観」が主張されている。真の思弁の領域である。われわれ脊椎動物における「直観」とは、「自らの意識と自分との間に置かれた幕を取り除くとき」に成立する「無媒介で利害関心を脱した」原直観^uであり、何よりもまず「われわれが……精神について有する直観」である。「無媒介」とは、認識している意識と認識されるもの(対象)との間に隔たりのないことを意味している。存在論的な絶対性である。意識と意

識されている自分（「精神」とは同一の存在である。では、内面の「物質性」についての認識はいかに成立するのか。ここに捻じれが生じる。思弁の領野に第三階梯と第四階梯からなる実践の領野を対置するとき、この捻じれは明確になる。

物質についての認識を求めるなら、その認識機能として「知性と諸感覚」とが候補者になる。ことに「哲学者なるもの」とっては「知性」が予想される。知性は物質認識向けに出来ている。しかるに知性も「諸感覚と同様」、思弁的な認識機能ではない。「知性は、何よりも行為の諸々の必要に係ずらつてゐる」。その認識対象は、すでに「利害関心」に応じて「再現表象」となつてしまつてゐる。「利害関心を脱」すること「再現表象 re-présentation」たることは矛盾するのである。なぜか。「再現」された表象は、二度目の現れであつて、「無媒介」ではないからである。この場合「媒介」とは、存在を「行為の領野」に移し入れて、実践的な表象として「再現」すること意味する。存在を実践向けに変換してしまつてゐる。仮象たる外部世界である。認識論的には、「行為」の有用性に応じて、「流動」の「自然本性」たる「本体の実在性」は「表象」として「諸々の事物」に変換されている。認識論的な相対性である。脊椎動物の知性が、進化するなかで、仮象たる実践の領野を開いたのである。しかしそれだけではない。第二階梯の存在とは時間であり、第三階梯・第四階梯において時間は空間化される。「内面の生」に対して「実践的な利害関心」に応じて「眼差しを向け」るなら、そのことによって、「われわれに利害関心のある諸々の時間契機が持続から離脱してくる」。この「離脱」によって、存在論的に絶対的であつた「内面の生」と内面の「物質性」とからなる第二階梯の「持続」が空間化されて霧散する。物質の認識について言うなら、「物質の生成」が「瞬間の、まさにそのゆえに不動の様々な視（「られた」）像」と成る。そうなれば「持続や生成という

言葉を使う場合でさえ、われわれが考えているのは別のものである」。日記や予定表のごとくに紙の上に記され、数直線上に同時に在る「持続」である。「言葉」の使い方において似非思弁となる。「諸々の時間契機 les moments」（第二階梯）が「諸々の瞬時 les moments」（第三階梯）に、「様々な瞬間 des instants」（第四階梯）に変換される。「瞬時」「瞬間」とは空間の規定である。その複数形は、空間上の同時性を表現している。映画のコマのごとく「飛び飛び」の複数の「視（「られた」）像」、空間化された「視像」である（cf. EC, 302-07）。連続する時間は諸々の非連続の写真のコマに分解される。ただし分解は「眼差しを向ける regarder」ことによって果たされる。「視（「られた」）像 des vues」は実践的な「眼差しを向けること」によって「創り出」される。写真のコマは原理上、眼差しの下で同時に併置されるからである。そうやって発生する外部世界とは空間世界のことである。こうして「自らの意識と自分との間」に「幕」が置かれる。自己認識にせよ、「幕」は認識機能と認識対象との間に隔たりを産む。対象化である。「対象」は、そのように対象化されて自らの対象性を獲得し、そうやってはじめて成立する。存在論的な相対性である。「眼差しを向けること」が存在論的な相対性を産み出している。そうやって対象を仮象たらしめている。「直観」であつた「意識」（第二階梯）は、今や実践的な意識たる「知性」（第三階梯・第四階梯）と成つてゐる（cf. EC, 270）。「意識はそうなる」と今度は知性に則つて律せられ。原意識の知性化である。その際、「生成」は「様々な状態」に、「持続」は「様々な瞬間」に変換される。「唯一懸案のものが行為たるかぎり」、すなわち実践の水準に留まるかぎり、「そうするのには理がある」。が、こうした存在論的相対性を存在論的絶対性だと主張するなら、似非思弁となる。それだけではない。「われわれは、この諸々の時間契機を持続の流路に沿つて」、空間化された「諸々の瞬時」として「拾ひ集めたのである」。かくして「不動なるものを介して

運動するものを思惟する」ことになる。第一の「思い込み」である。「諸々の瞬時」はすでに回顧的である。「回顧的に視る」は *vision rétrospective* は……知性の自然本性的な機能である」(EC, 238)。流動する「時間契機」を「飛び飛び」に「拾い集めた」のは、当の流動が過ぎ去って後のことである。「自己形成しつつある」ことは、「すでに形成されてしまっているもの」に変換される。そうやって、隔たりを介した実践的な認識の場が開かれる。認識する意識たる認識機能は、もはや認識対象の持続の当事者ではない。

存在論的相対性の発生をもう少し具体的に思い描いてみよう。実践の領野のうち、第三階梯は脊椎動物に特有な行為空間からなり、第四階梯は高等脊椎動物に特有な幾何学空間からなる。「張り緩み」から時間面を残存させた行為空間たる「張り拡がり」が、さらにはその極限において純粹に空間的な幾何学的な「拡がり」が帰結する (cf. EC, 203, 218, 224, 238)。「張り緩み」は、「張り緊め」の「縮約」による時間が「弛緩」して空間へと到る方向に在る。「物質性」の方向である。さて、第三階梯において空間世界が発生する。行為空間とは、諸々の〈そこ〉の集合からなるわれわれの日常の「世界 *le monde*」——「物質世界」——のことであり、当の〈そこ〉において諸々の「物体」たる「事物」や「物体」の「状態」が存立する。諸々の〈そこ〉は諸々の〈それ〉の在り処である。諸事物——物体とは〈それ〉として事物化された物質である——とその関係——「目をもった網 *un filet aux mailles*」(EC, 203)とも呼ぶべき当の関係の網をなす空間たる諸々の〈そこ〉——からなる「再現表象」の世界である。「安定したもの *le stable*、不変的なもの *l'immuable* は、われわれの知性が、自らの自然本性的な性向のせいで執着するところのものである。われわれの知性は、もっぱら不動性を自らに明晰に再現表象する」(EC, 156)。もともと、〈そこ〉という空間的な「不動」の場が「表象」として「再現」しているのは、〈将来〉という時間的な「運動」の場である。〈そ

こ〉にはいまだ時間の残滓がある。〈そこ〉は〈将来〉の「再現表象」である。〈今〉⁽¹²⁾〈ここ〉が私の身体の在り処である。〈そこ〉において行為を將に為さんとしている「身構え *attitude*」は、身体性として〈今〉〈ここ〉に在る。〈将来 *avenir*〉は「身構え」において、〈將に來たらん *à venir*〉としている。〈今〉は身構えにおいて〈将来〉と相互浸透している。身構えにおいて「われわれの知性は、諸々の事物に対するわれわれの行為を準備」(引用A)している。目の前の鉛筆なる事物を〈そこ〉において將に手に取らんと、当の事物に向かつて私の身体は〈今〉〈ここ〉において「身構え」ている。手の型に結実する「身構え」に応じて「鉛筆」と成った〈それ〉は〈そこ〉に在る。「身構え」が異なれば、当の〈それ〉は「耳かき」にも成る。ただし〈そこ〉も〈それ〉も相互外在性——空間性——の図式である。〈ここ〉は世界に在っても、〈今〉は時間性の階梯たる第二階梯に属す。〈今〉〈ここ〉は第三階梯における第二階梯の残滓である。第三階梯は「瞬間」ではなく、「瞬間も同然 *quasi instantané*」(EC, 300, 305)の世界である。第三階梯においても、いまだ「下降」と「上昇」とは完全には切り離されてはいない (cf. EC, 11)。「身構え」はさらに、或る〈そこ〉と他の〈そこ〉との関係が発生する所以でもある。手に取ろうとしている目の前の鉛筆の在り処たる〈そこ〉と声を掛けようとしている窓の向こうの友人の在り処たる〈そこ〉とは、〈ここ〉からの隔たりに相違がある。「身構え」の在り処たる〈ここ〉は、諸々の〈そこ〉に対する「行為中心 *centre d'action*」(EC, 262, MM, 14, 47, 153, 256-7, 261)である。そして、こうした複数の〈そこ〉から、高等脊椎動物たる人間に特有な幾何学空間が発生する。行為空間の抽象化たる等質空間、第四階梯である。すべての〈そこ〉は平準化される。〈ここ〉はもはや存立していない。〈ここ〉から諸々の〈そこ〉までの隔たりの相違もない。平準化された〈そこ〉は、もはや〈将来〉の再現表象ではない。「身構え」は存立せず、時は流れない。純粹空間である。

が、行為空間にせよ等質空間にせよ、空間なるものは脊椎動物に固有な認識対象にすぎない。仮象——再現表象——である。もともと脊椎動物には——したがってまた『物質と記憶』には——否定のしような根源的仮象だが。

認識機能についても、同様に四つの階梯を区別することができる。内面の認識たる直観——原直観——は思弁の領野に、外部の認識たる知性は実践の領野に位置づけられる。直観は〈ここ〉における時間認識である。「カントは、精神が知性をはみ出すということを考えなかったし、おまけに（そして基底においては同じことになるのだが）端カラ、時間を空間と并列に置くことにしてしま……」（EC, 207）⁽¹³⁾。ベルクソンによれば、精神は直観において知性を「はみ出す」。認識機能の面において、「精神」の二形態たる直観と知性は互いに対立する（EC, 267-8）。直観は「感取 sentir」（EC, 165, 173, 192-3, 201, 212, 239-41, etc.）の働きであり、「感情 sentiment」（EC, 175-6, 179, 203, etc.）である。⁽¹⁴⁾ 進化における原初の動物たる原動物は原直観と原知性とを具えていた。原意識である。一方で脊椎動物はそのうち、原知性の側のみを進化発達させた。原直観を進化発達させて直観を得た節足動物が原知性を保持していると推察されるのは逆に、われわれ脊椎動物は原初の直観たる原直観を今でも保持している。⁽¹⁵⁾ ただし知性のゆえに、原直観には曇りがかかる。「直観はほぼ全面的に知性の犠牲になっている」（EC, 287-8）。実践的認識たる知性が、生きて生活してゆくべく、外部へと向かうからである。「意識は……知性に則って律せられ、内面の生に⁽¹⁶⁾関しては、すでに形成されてしまっているものに眼差しを向け、それで生が自己形成しつつあることは漠としてしか感取しない」（引用A）。しかしそれでも、「漠として」なら「感取」している。「自己形成」は、「漠として」だが、直観される。内面の認識たる直観は実践的には無用であるが、藝術や哲学においては別である（EC, 224-5）。他方でわれわれ脊椎動物は、知性を進化発達させたがゆえ

に、原知性そのもののほうは喪失してしまっている。⁽¹⁶⁾ 現在のわれわれ脊椎動物が、内面の「物質」を「肯定的」に認識しえない所以である。当の「物質性」たる「張り緩み」を認識するには、空なる直観——否定的直観——を有するのみである。否定的な系列において認識機能は、否定的直観から知性へと移る。してみるとこの否定的直観とは、原知性の——われわれ脊椎動物における——進化上の残滓ではなからうか。原知性は、現在のわれわれ脊椎動物のその内面において、直観の否定面として今も残存している。『創造的進化』における以下の一文は、その意味に解そう。

「哲学は、直観がほかならぬ精神であり、それで、或る意味においてほかならぬ生⁽¹⁷⁾であることを覚知する。知性は、物質が産み出された過程に類する過程によって、直観から切り出される。かくして、心的生の統一性 l'unité de la vie mentale が明らかになる。直観のうちに身を置いて、そこから知性へと進む場合のみ、われわれはこの統一性を認める。なんとなれば、知性からは、直観へと移行することは永久にないからである」（EC, 268, cf. 271）——引用B

「知性は、物質が産み出された過程に類する過程によって、直観から切り出される」。が、逆に「知性からは、直観へと移行することは永久にない」。「移行」は内面から外部へ一方通行である。進化の観点である。現在のわれわれ脊椎動物において、進化上の原知性は否定的直観に成ってしまった。進化初期における「心的生の統一性」において、原動物は原直観と原知性とを、おそらく両者ともに肯定的に具えていた。脊椎動物は、だから「そこから知性へと進む」ことができたのである。内面の認識機能たる原知性は外部の認識機能たる知性へと進化した。その反面で、原知性を喪失した。

原一知性の認識していた「物質性」が、現在のわれわれ脊椎動物にあつて「否定的観念」となっている所以である。これに対して原一直観のほうは進化せず、内面にそのまま保持されている。直観たるわれわれの認識機能は、自らが認識している（対象たる）「精神である」。肯定的で「無媒介」な存在論的絶対性である。意識たる直観と直観される精神との間には隔たりはなく、両者は同一の存在である。ゆえに直観が「生である」のは「或る意味において」のことである。別の意味においては、「物質性」たりうるからである。ただしそれは、現在のわれわれにおける進化上の残滓たる空なる否定的直観、原一知性の残滓にはかならない。実践の領野における知性という認識機能と思弁の領野における「物質性」との間には捻じれがある。

進化説という壮大な仕掛けをベルクソンが用いたのは、この捻じれを説明するためだったのかもしれない。現在のわれわれ脊椎動物による「哲学なるもの」の限界である。内面の「物質性」についての「肯定的」認識の欠如、原一知性の不在という空隙。真の思弁は、進化説を通過しただけに、この陥穽を自覚している。現在のわれわれにおける空なる認識機能と成った原知性がなければ、こうした捻じれは生じない。また、それについて論じることもしできない。『創造的進化』の四階梯説にほぼ対応しながらも、『物質と記憶』の四水準説に欠けている観点である。『物質と記憶』における「張り緩み」の説の欠如は、〈否定の秩序〉の、したがってこの捻じれの観点の欠如に直結している。しかしまた、物質の系列において内面の「張り緩み」から空間への「移行」によって『創造的進化』は、脊椎動物の進化のなかで「物質と記憶」を基礎づけてもいる。なかでも、後述のように、「生成の切断」の説が基礎づけられる。⁽¹⁷⁾

引用Aに戻って認識論について確認しておこう。第二階梯の内面において、すでに指摘したように、一方で「張り緊め」たる「精神」の「自己形成」

——〈肯定的秩序〉——の働きは「直観」によって認識される。他方で「張り緩み」たる「物質」の「自己壊脱」——〈否定の秩序〉——の働きの原一知性の残滓たる否定的直観が対応する。第三階梯においては、その原一知性から進化した知性という実践的認識機能が、「流動」を「諸々の事物」に変換するのであった。仮象であり、知性による作為である。認識論的相対性は知性によってもたらされる。その所以は「われわれの張り向けの注意」に存する。「張り向けの注意」が、作為的な認識の場たる第三階梯を開く。認識の場における「非事物なるもの l'irréalité」は、「自分の手に入れたものの関数として表現」（引用A）される。「注意」の「張り向け」られる場であり、実践の領野である。《les moments》の語が、「諸々の時間契機」（第二階梯）から「諸々の瞬時」（第三階梯）へと変換されたように、《le réel》あるいは《la réalité》の語は、当の「関数」に应じて、「そこから立ち出でることはできない」——隔たりの生じようのない——内面の「実在する本体 le réel」（第二階梯）から「事物的なもの le réel」（第三階梯）へと変換される。第三階梯たる実践の領野における「事物」「非事物」は、「自分の手に入れたものの関数」である。「手に入れたもの」とは、未だ手に入れておらず、かつ、手に入れるべく「行為を準備」している当の対象たる「諸々の事物 les choses」のことである。「準備」という点で存在論的相対性を前提として、「事物」という点で、対象はすでに認識論的相対性を帯びている。知性にとって「対象にすぎない」「事物」なるものは、「状態」なるものと同様、変化せず、時間の「流動」に対立する。第二の「思い込み」は第三階梯の「変化のない習慣 les habitudes statiques に起因」（引用A）する。こうした「事物」なる「充実したもの」を思惟する「ために」、「事物」という意味方向の「関数」において、われわれは反対の意味の「空虚」を利用する。その際に、第二の哲学的な「思い込み」が生じる。すなわち、「事物」を製作する際、製作前には当の「事

物」が未だ「無」のように、「事物」の「無」を主張するというわけである (cf. EC, 156-8)。「無」という「偽表象 pseudo-representation」(EC, 222) の発生である。〈それ〉は、「鉛筆」だろうと「耳かき」だろうと、「身構え」の対象として、反復される行為の対象として、個物ではなく「事物」として、すでに意味的な存在になっている。「事物なるものはわれわれの悟性⁽⁶⁾によって遂行される固体化作用 solidification から結果するのであって、様々な事物は、悟性が構成したもの以外になく」(EC, 249)。「事物」とは、定義上、それ自体において「変化」を含意していない意味的存在である。「行為の目差すところ」は、「いまだ現存していない何ものかを創り出すことにある」(引用A)。「創り出す」とは、何よりもまず、実践的な「悟性」を支えている身構えによって時間の「流動」が「固体化」され、〈それ〉が「何ものか」たる「事物」として「創り出」されることである。行為せんとしている身体——行為身体——たる身構え——身体性——が「再現表象」を与える。身体性は「再現」が成立すべく存在論的相対性を開き、かつ、それによって「表象」たる「事物」を存立せしめる。そうやって、「事物」の未だ「無」いことも可能となる。ただし、それは「自らに欠けていると感取している対象」(引用A)である。「自らに欠けている」とは欠如を意味しており、欠如の「感取」たる欠如感において、むしろ行為に先んじて、身構えにおいて、対象の不在が「感取」されている。身構えとその対象たる事物の欠如とが内面の身体において感取されている。身構えは、いわば雌ネジとして、不在の雄ネジたる事物を世界内に再構成しているわけである。してみると行為は、無からの創造ではない。むしろそつした「感取」において「予期 prévoir」(EC, 6, 27-9, 225, 329, etc.) せる「事物」を「創り出す」。そしてそれは「行為の領野」たる第三階梯においては「合法的」である。しかし「思弁する際も、こうした語り方を、かくしてこうした考え方を保持する」なら、似非思弁となる。

二、物質認識における無秩序と捻じれ——第二の「思い込み」における「阻止」の取り違い

少し各論に入ろう。ベルクソンの批判する哲学的な「思い込み」は二種あった。いずれにおいてもその「端緒」は、実践の思弁への移し入れに存しているのであった。その際「否定的観念」が問題になっていた。そして問題点は生⁽⁷⁾よりもむしろ物質に関わっていた。脊椎動物にあつては、認識機能と存在との間の捻じれは、物質認識において生じるからである。節足動物とはおそらく違って、われわれ脊椎動物は原物質の認識たる原知性を喪失してしまっている。では、そうした捻じれはいかにして「思い込み」を生じせしめるのか。まず第二の認識論上の「思い込み」に関して、「無秩序」の観念を中心に瞥見してみよう。第二の「思い込み」によれば、充実の思惟は空虚を起点とするのであった。これに対して、「無秩序」の観念は、一方では『創造的進化』第三章後半の第一パートの主題であり、しかも第四章前半の第一パートでも「秩序が空虚を埋める」(EC, 275)という表現に見られるように「無秩序」が「空虚」に置き代えられている。「無秩序」は認識論上の問題の「端緒」と「帰結」の両方に関わる。

その際に焦点になるのが身体性であり、そのもたらす「阻止 interruption」⁽²⁰⁾の働きである。すでに記したように身体性とは、われわれの内面における物質性の規定たる「張り緩み」に等しい。一方で〈今〉〈こゝ〉における行為への身構え——行為身体——のことであり、行為対象は当の身構えに応じて世界内の事物に成っている。他方で「相反する二方向」の「流動」のうちの外部化の方向のことである。ただし認識論的には絶対的であっても、「張り緊め」に対する「抵抗」(EC, 99, 128, 157, 192)として、その否定としてしか現出しえない。内面の直観に現出する生の流れの「阻止」であ

る。「事象的」ではあっても「肯定的」ではない。「否定的観念の内容」である。抵抗感を含む内面の「努力の感情 *sentiment d'effort*」における「努力」はこの場合「張り詰め」の「努力」であり「肯定的」であるが、それが「努力感」たる「感情」であるかぎりにはむしろ、暫定的にであれ、「努力」が「阻止」されていることについての「感情」たる抵抗感でもある (cf. EC, 237-8, 239, ES, 174, 176-8, etc.)⁽⁷⁾。否定的直観である。ベルクソンは「数学形式の科学の成功」の理由を以下のように提示する。

「数学の秩序には肯定的なものなど一切なく、それは或る某かの阻止の自ずと向かう先の形態〔形式・形相〕*la forme où tend, d'elle-même, une certaine interruption*」であり、それで物質性なるものは、ほかでもないこの類の阻止からなる……この数学の秩序は反対の秩序の阻止から無為のままに *automatiquement* 産み出されるのであって、それは阻止〔されて出来た面〕のことにほかならない……様々な数学の法則のいかなる特定の体系も、自然の基底には存しておらず、それでいてしかも数学一般は、物質のさらに落下してゆく方向を端的に再現的に表象している *représente simplement le sens dans lequel la matière retombe*。

しかし哲学者なるものはおそらく、こういった考察を基礎にして一つの認識説 *une théorie de connaissance* を据えることなど受け付けないだろう」(EC, 220-1) — 引用〃

一方で「物質性」は「阻止」として現出する。生と「反対方向」の「流動」という存在論上の説は、認識論上においては、それに対する「抵抗」(EC, 255)として、その「阻止」として現出する。存在論上の「二種の運動 *deux mouvements*」(EC, 11, 130, 250, 339)のうち、「下降」の運動は、われわれ

脊椎動物にあつては、「否定的観念」として肯定的な生の運動の「阻止」という「内容」をもつて現出する。「阻止」とは外部へと向かう運動が内面の側において現出するその仕方である。「阻止」たる「物質性」も、「数学」と同様に、「否定的」である。しかし他方で「物質性」そのものは、「数学一般」とは違って、「自然の基底」に存している。第二階段の時間規定たる「張り緩み」である。「数学」はそうした「阻止の自ずと向かう先の形態〔形式・形相〕」にすぎない。それは「物質のさらに落下 *retomber* してゆく方向」を示している。「物質世界の眺めは落下してゆく錘の眺め」(EC, 246)であり、ほかならぬ当の「落下 *tomber*」が、「人為的・作法的」に「さらに *re*」継続せしめられて「数学一般」に至る。「張り緩み」たる「物質性をなす運動」が「われわれによつてその極みにまで、すなわち、等質空間にまで繰り延べ *prolonger* られた」(EC, 220)姿である。存在論上は、「数学」が人為的な仮象たるのに対して、「物質」のほうは本体の実在性を具えており事象的である。しかし認識論上は、いずれも否定的である。すなわち、「物質」が事象的かつ否定的であるのに対して、その終点たる「数学」は仮象的かつ否定的である。そうした「阻止」たる身体性に関して一種の取り違いが起こる。この取り違いが第二の「思い込み」への屈折点である。抵抗として内面に現出していた「物質性」という〈否定的秩序〉が、〈秩序の否定〉と取り換えられる。「否定的観念の内容」規定の取り違いである。「無秩序」に関するベルクソンの説明 (EC, 221-3) に耳を傾けてみよう。

実践の領野において、書物が詩と散文とに分類されるとせよ。日常世界においては、実践的な利害関心に合わせて対象を、求めているものの「関数」として認識するのであった。図書館でたとえば散文を求めている際に、詩に出会えば、散文で〈無〉い当の書物は、求めているものと異なるがゆえに、実践的には「無 *le néant*」(EC, 275-7)に等しい。詩の〈無〉は、「私の知覚

の所与を私の待機や張り向けの注意の言語体系 *la langue de mon attente et de mon attention* に翻訳する」ことで決定される。しかるに、こうした「実践向きに出来ている手法」たる日常の「表現する」仕方を「思弁へと移し入れる」なら、この〈無〉という否定辞の読み違いとなる。「無秩序」はこの場合、詩と散文に「共通の基体」に該当する。そうした二者の同時否定は成立しないがゆえに、「無秩序」とは「偽―表象」ないし「偽―観念」にはかならない。当の「無秩序」の語には指示対象が²²無^な (EC, 277, 283)。否定の強選言が否定の連言になってしまったわけである。「詩と散文は二つの言語形式 *deux formes de langage*」であるがゆえに、「未加工の言語 *un langage brut* に重ねて置かれた」と。両者の同時否定を「基体化 *hypostasier*」して、両者に「共通の基体にしてしまった」。同様の読み違いが實在説と観念説とに共通している。両者はこの種の「偽―表象」を共有している。質料あるいは感性の雑多である。形相・形式が、質料・感性の雑多に重ね置かれる。かくして、「秩序が無秩序に自らを承け入れさせる」ように、「形相・形式が自らを質料・物質に承け入れさせる」という構図が成立する。

しかし以上のベルクソンの説明は、それだけでは手品である。アリストテレスやカントの主張する質料や感性の雑多は、二者の同時否定ではないからである。「秩序」に該当するのは、形相なり形式なりであって、二つの形相や二つの形式が主張されているわけではない。これに対してベルクソンは、否と言う。隠れた二元説なのである、と。それを暴くためにベルクソンの提示するのが「類」と「法則」との「混同 *confusion*」(EC, 223-32)である。いずれも「反復 *répétition* / *répéter*」²³、「一般化による類化 *généralisation* / *généraliser*」(EC, 226)を許す。「そこから、自然の秩序、一般 *ordre général de la nature* とどう考えが生じてくる」(EC, 227)。そうなれば「秩序」は一つである。しかるに生物の「類」は「生の秩序」に与しており、「法則」は「物

質の秩序」に与している。いずれにおいても「結果」は類似するが、物質の「法則」における結果の類似(同一性)は、「原因」となるその「諸要素」の類似(同一性)に依存する。これに対して、生物の「類」における類似(親子の類似、生物種内の類似)は、「無限に複合的な基本要素となる原因がまったく別様でありうる場合でさえ、同一の結果」になりうる。さらに、そうした基本要素なり原因なりの一部が「不在だったり、逸脱したり」しても、「事態はしかるべく戻」され、「結果の安定が確保される」場合もある (EC, 226-7)。今日に言うホメオスタシスに近い考え方であろう。かくして、こうした秩序の区別を目印とするかぎり、二種の「反復」や「一般化による類化」は区別される。しかし逆に、「反復」や「一般化による類化」のほうを目印とするかぎり、二種の秩序は「混同」される。しかるに「反復」や「一般化による類化」という「性格」は、「生の秩序」と「物質の秩序」との間で「起源をまったく異にする」にもかかわらず、「利害関心上、混同することに利のある性格」である (EC, 225-6)。それは「われわれの行為の観点に本質的な性格」であり、「同じ事物や同じ状況の待機」を宗とする「日常生活」の「利害関心」に依じている。かくして、アリストテレスやカントの説は、実践的な考え方から導かれるこの「混同」に発している。「思弁」の領野における「ただただ内的な方向の違い *une diversité tout interne* にもかかわらず」、外部の類似に固執する実践的な意識が「思弁」へと移入された (EC, 227)。アリストテレスに代表される古代の人々の「類」概念は「法則」の一般性を含み、カントに代表される近代の人々の「法則」の一般性は「類」概念を含んでいるのである²³。実際アリストテレスにおいては、本来は生の秩序に属す目的説が物質に適用されている。「石」の落下は、自らの「自然の場所」を「目指す」(EC, 229)。物質も生の秩序の下に収められる。逆にカントにおいて法則は「様々な事、物、相互間の、あるいは様々な事、実、相互間の関係である」(EC, 230)。「関

係」のほうは知性の形式である。しかし関係の「項」たる「事物」や「事実」は、当の関係から「独立な仕方で現存しうる」。「『もの自体』」である。そして「生ける類」は「項」の側に属すと解される (EC, 231)。カントの説にも生の秩序の残滓が見出される。かくして実在説も観念説も、隠れた二元説という似非思弁の在り方を纏っている。

してみると以下のように解することができる。すなわち、二元を隠し持った一元説から、「無秩序」の主張が発生する。二元においてなら「他方の類の秩序との関係のなかで偶発的 contingent」な秩序が、一元においては、「秩序そのものの不在との関係のなかで偶発的」と読み替えられる。そしてもし二つの秩序が「同じ種類に属す」なら——それが実在説の「類」であれ、観念説の「法則」であれ——一元となり、その「不在」は二つの秩序の同時否定に該当する (EC, 234-7, cf. 233)。これが「無秩序」である。つまり「無秩序」には二義がある。強選言における〈他方の秩序で無い〉という否定辞（「無秩序」が〈秩序が無い〉）という「無秩序」へと読み替えられ、それを介して、一方の秩序の〈否定〉たる「阻止」が連言における「無秩序」と、つまり〈秩序の否定〉と取り違えられたわけである。肯定・否定の関係における否定の取り違ひである (cf. EC, 286-290)。

一元説がいったん打ち立てられたなら、さらにそこから階層性が編み出される。ベルクソンによれば、「かくて、階層の頂上に生の秩序 l'ordre vital が、次いで、それを低減させ、その複雑性の程度の低いものとして幾何学の秩序が、そして最後に、一番の下層に秩序の不在が、ほかならぬ乱雑 incohérence が置かれる」となる (EC, 237)。われわれは、こうした階層性の生じる所以を知性という認識機能と存在との間の捻じれに見出すことができる。二種の秩序からなる隠れた二元説における「〈無い〉」の名残である。そして当の二元が顕在化されて——「生の秩序」と「幾何学の秩序」として

——階層性を帯びるのは、知性的動物の認識の根源的仮象性に由因する。存在の側には生と物質との間に優劣は見出されず、知性の認識においてこそ物質が仮象的になるからである。実在説においても観念説においても、二元を隠し持った一元説は人間知性という認識機能と存在との間の捻じれから生じているのである。〈否定の秩序〉が〈秩序の否定〉たる「無秩序」に取り違えられるのは、身体性が「阻止」として否定的に現出するという認識機能の陥穽のゆえである。「無秩序」とは「阻止」という「否定」の取り違いなのである。

三、物質存在における不動性と捻じれ——第一の「思い込み」における「生成」および「形態」の取り違ひ

では、認識機能と存在との間の捻じれから、いかにして第一の存在論上の「思い込み」が生じるのか。今度はこの点を瞥見してみよう。第一の「思い込み」によれば、不動から運動へと到るのであった。運動たる「真なる持続」を考えるには、「一足飛びに d'emblée 持続のうちに定位しなければならぬ」。が、「それこそ知性が、極めて多くの場合に拒否することである。不動なものを媒介に運動を考える習慣に染まっているからである」(EC, 298)。「一足飛び」になら外部から内面のへの帰還は可能だが、それは「習慣」を、反復を宗とする実践的機能たる知性に反する。知性は不動から運動へと進むしかない。では、いかにして進もうとするのか。ベルクソンはそれを「映画の方途」(EC, 306) によって説明する。

「行為を統御することは知性の役割である」。そうした実践的機能である以上、知性は対象の獲得を「目標」とする。「われわれが利害関心を有する

のは成果であって、諸々の途中の手段 *les moyens* にはほとんど重みがない⁽²⁴⁾。当の成果たる「終局目的」への途上に存する「手段」たる「行為を構成している諸々の運動は、われわれの意識から逃れる。あるいは意識には漠としてしか到来しない」(EC, 298-9)。われわれ脊椎動物の「知覚」の特性である。知覚は実践的であり、行為の「終局目的」を「先取り」している。「行為が遂行されたものと想定されている」わけである。〈将来〉の先取りである。時間的に隔たりのある〈将来〉が、〈今〉〈ここ〉において先取りされている。知覚の存在論的相対性である。ただしそれが可能なのは、「行為」が既知のもので、「表象」が仮象として「再現」されて反復されるからである。

「知性が現働的な活動 *activité* に向けて再現的に表象するのはもっぱら到達すべき様々な目標、すなわち様々な休止点である。それで、或る到達目標から他の到達目標へと、或る休止から或る休止へとわれわれの現働的な活動は一連の跳躍によって移り行く。その間、われわれの意識は、遂行されつつある運動にはできるだけ背を向け、遂行されてしまった運動の先取りされた[想像]像 *l'image anticipée* にのみ眼差しを向ける」(EC, 299) - 引用D

知覚世界たる物質世界についても同様である。「もし物質がわれわれに永続的な流れ *un perpétuel écoulement* として現出するならわれわれは、自らのいかなる行為にも終極を指定したりすることはない」。「目標」が「再現的に表象」されるには、「いつまでも逃げ去る将来 *un avenir toujours fuyant*」を「先取り」する必要がある。物質はもはや第二階梯の「流れ」ではなく、第三階梯の「物質世界」と成って「或る状態から或る状態へと移行する *passer d'un état à un état*」(EC, 299)。〈そいつ〉たる物質世界も〈それ〉たる知覚対象も、

過去を反復しつつ〈将来〉に再現された表象である。

われわれの日常の知覚は「映画の方途」を用いることになる。一方で知覚対象における「性質」、「形態あるいは本質」、「行い・働き」ないし「位置あるいは意図」の三者 (EC, 303, 307) は、いずれも「状態」の一種である。三者は「エイドス」の「三つの意味」であり、これは「おそらく、『視[られた]像 *vue*』、あるいはむしろ『瞬時の契機 *moment*』と訳すべきである」(EC, 314)。「瞬間の……不動の様々な視像」(引用A)である。しかしそうであるだけに、「不動」の状態だけでは、「反復」を宗とする日常の知覚だけでは「運動」を「再構成」することはできない (cf. EC, 305)。不動の諸状態をいくら並置しても、多くの「写真だけを相手にする」も同断である。ゆえに他方で『「生成一般 *devenir en général*」』(EC, 306-7) が、「運動一般 *le mouvement en général*」(EC, 305) が要求される。一方には「状態」が、他方には「生成一般」が在って、両者を「合成 *composition*」(EC, 304, 305) すると知覚における「運動」が生じるというわけである。二つの不動の「合成」である。映画は、「運動一般」たる「匿名の運動を個人の諸々の身構えと合成することによって、それぞれに個別の運動の個性を再構成」(EC, 305) しているのである。唯物説と唯心説は、こうした不動を起点にしている。⁽²⁵⁾ 実践を前提とした似非思弁である。『「生成一般」について私の有している認識は、言葉上のものにすぎない」(EC, 306)。「われわれの知覚の作為的なところは、われわれの知性のそれや、われわれの言語のそれと同様、極めて多様なそうした諸々の生成から、生成一般という唯一の再現表象を抽出することに存する」(EC, 303-4)。「生成」の取り違いである。

「性質」や「行い・働き」と並んで、「形態」もこうした「状態」たる知覚の一つである。「形態」の進化も「映画の方途」で説明されることになる。すなわち、「有機体」のその「形態」とは「進化」における「安定した一つ

の視「られた」像」のことである。「われわれは進化の一時期を」そうした「視「られた」像に集約する」(EC, 301)。ただしその場合は、第四階梯における純粹知性の対象たる生物学的な形態、生物の幾何学的な形態ではない。むしろ第三階梯の行為する身体にとつての形態である。目の前の細長い棒たる「視「られた」像」は、われわれ脊椎動物の行為する手の構えに応じている。手の構えが当の細長い棒を「鉛筆」の形態たらしめている。その意味で、形態は集約された「一個の平均的〔想像〕像 *une seule image moyenne*」であり、「或る事物なるものの本質 *l'essence d'une chose*」を表現している。²⁶⁾「形態は、不動なものに属す」。「一つの推移を写したスナップ写真にはかならず」(EC, 302)。かくして、「生成一般」を下地として、その上に個々の「不動」の「形態」が置かれるという二層構造が完成する。第一の「思い込み」の発生である。

しかるに、一方で『創造的進化』の末尾によれば、「哲学とは生成一般を深層へと掘り下げる」営みである(EC, 389)。「映画の方途」においても、帰するところ「どこかに運動が存在していなければならない」。たとえば「映画機のなかに」(EC, 305)。ベルクソンは「映画の方途」を批判しつつ、「われわれは、自らを諸々の事物の内面の生成 *le devenir intérieur* に繋ぎ留めることなく、諸事物の外側に身を置いてその生成を作為的に再構成している」(EC, 305)と認める。隔たりを介して「生成」を「再構成」することなく、隔たりなしに第二階梯の「内面の生成」と接触する途が指摘されている。ただし、それはもはや「生成一般」ではない。個々の「生成」である。「再構成」されることになるその元に在るのは「それぞれに個別の運動の個性」なのであった。「生成」には二義がある。他方で「形態」については、²⁷⁾認める。

「本体の実在性においては *en réalité*、物体は何どぎでも、形態を変化

させている。あるいはむしろ、形態が不動なものであり、本体の実在性が運動である以上、形態など存在しない。実在する本体なるもの *ce qui est réel*、それは形態の連続的な変化である」(EC, 302) - 引用 E

「形態」に関する第二階梯における内面の「本体の実在性」が示唆されている。ただし一方で、われわれ脊椎動物は原知性を喪失している以上、「内面の生成」が認識されるにせよ、その際に認識される「物質性」は生の否定面である。他方で「本体の実在性においては」もはや「形態など存在しない」。今度は「形態」の存在が否定されている。しかしそれでもベルクソンは引用 Eにおいて、当の「存在しない」はずの「形態」にあくまでも言及している。いったい何が起こっているのか。第三章の第二パートをも参照しつつ、この点を確認し、小論の結びとしたい。

「生成」だけでなく、「形態」にも二義を指摘することができる。「映画の方途」における意味とは別に、しかもそうした意味へと取り違えられる基に、生成から形態へという方向の関係がある。「映画の方途」においては「生成一般」と諸々の「形態」との二層構造が示されていた。これに対して、形態は生成から直に結果する。一方通行の関係である。

「われわれの知性は本質的に実践的な機能であつて、様々な変化や様々な現働態ではなくて、むしろ様々な事物と様々な状態を再現表象すべく出来ている。もつとも、事物や状態とはわれわれの精神が生成を写し取った様々な視「られた」像にすぎない。事物など存在しない。在るのは作用 *action* のみである。いっそう個別的に言う、われわれの生きて生活している世界 *le monde* を考察するなら私の見出すことだが、その見事に結びついた全体の自動的で厳密に決定された進化進展 *l'évolution* は自

「已壊脱する作用の某か de l'action qui se défait であり、⁽²¹⁾「たる世界」において生が切り取る予期せぬ諸形態、予期せぬ運動へと自らを繰り込みうる諸形態は自己形成する作用の某か de l'action qui se fait を再現的に表象している」(EC, 249) — 引用F

「形態」は「世界」に在る。「再現表象」たる仮象である。内面においては、「事物など存在しない」以上、「形態など存在しない」。「在るのは作用のみである」。「内面の生成」である。「自己形成」の「作用」は、一方で第二階梯における「生」の「生成」の働きであり、それによって「世界」において「予期せぬ諸形態」が「切り取」られる。外部の「形態」は「内面の生成」の結果である。「形態の創造」(下記の引用)である。「予期せぬ」とは「生」の特性である。これに対して「切り取」られた「形態」は、第三階梯の「世界」における「再現表象」である。してみると「内面の生成」とは、「形態」へ向かう「運動」のその「方向」のことである。「物質性」である。そのかぎり「形態」は本体の実在性に与してはいる。しかし第二階梯に存する当の運動の「方向」には、終着点は存在しない。「永続的な流れ」である。「形態」は、「世界」の側に在って、当の「自己形成する作用の某か」を「再現的に表象している」にすぎない。内面の本体の実在性を有することはない。この「再現表象」によって、「自己形成する作用」は——部分冠詞に示されているごとく——その「某か」へと変形を被る。「再現」されて当の「作用」の結果たる世界内の「表象」と成る。逆に言うならわれわれは、「内面の生成」の「外側に身を置いてその生成を作為的に再構成している」わけである。空間的な「表象」である。こうして「諸形態」と「生成一般」という二層構造との取り違いが生じる。「創造されることになる様々な事物と創造する一つの事物」(EC, 249)とが分離する。第二階梯に存する「個別の運動」たる「生成」

が、第三階梯におけるその結果たる「諸形態」を介して今度は、「生成一般」として「再現表象」されるわけである。他方で逆に、当の「諸形態」は、「予期せぬ運動へと自らを繰り込みうる」。第二階梯の「運動」である。なるほど、結果たる「形態」が原因たる「生成」の原因となることはない。あくまでも次なる段階への「繰り込み」である。が、しかし第三階梯の「世界」における「形態」は、第二階梯の「自己形成」へと接続しうる。生成とその結果たる「形態」との関係は、一方通行のなかで再開されもする。それだけではない。第二階梯における内面の「自己壊脱」のほうも、「世界」内に「再現表象」されるなら——こちらも部分冠詞に示されているごとく——「自動的で厳密に決定された進化進展」へと変形される。内面における「二方向」の「流動」の一方たる「物質性」の「作用」が、「世界」たる空間における厳密に「自動的」な「進化進展」と成る。唯物説的な機械説(cf. EC, 102-3, 196-2)に謂う物質である。かくして、生物の「諸形態」とは、「自己形成」と「自己壊脱」という内面の運動の外部化された「再現表象」にほかならない。時間の空間化である。「諸形態」は空間化された〈そこ〉において仮象——〈それ〉——と成つてゐる。ただし「無秩序」の場合とは違って、直接の根拠を有する仮象である。

われわれ脊椎動物にあつては、内面の「流動」に対抗する「阻止」たる「物質性」が外部化され「形態」と成つて世界に現れる。しかし内面における「物質性」たる「自己壊脱」を知性は認識できない。唯物説と唯心説とが唱えられる所以である。「阻止」という内面の物質認識を知らぬ実在説と觀念説と同様、「形態」に成る内面の物質存在を読み違えたのである。⁽²²⁾「形態」は「視(られた)像」であるが、「生成」は当の「像」へと到る「運動」である。生成と形態とは「合成」される別々の二要素ではない。「形態の創造」とは、形態へと向かいつつも、形態へと到ることのない「生成」である。

ただし気をつけよう。「形態の創造 *une création de forme* をわれわれは内側から把握し、それをいかなる瞬間も *à tout instant* 生じる。つまりまさしく……創造する流れが一時的に阻止される *le courant créateur s'interrompt momentanément* 場合に、それは物質の創造となる」(EC, 240)。形態は「創造」され続けている。「世界」内への「物質の創造」である。そして第二階梯において、その「創造をわれわれは内側から把握し、それをいかなる瞬間も生じる」。内面の生ける「直観」は、「いかなる瞬間も」成立している。「創造」は連続的である。逆に言うなら、「形態」の発生とは、当の「流れが一時的に阻止される場合」のことである。「形態」はそうした「流れ」の「一時停止 *une pause*」(EC, 241)を意味している。「流れ」の「阻止」によって発生する「切断面」である。「諸事物なるものは、この類の流動のさなかに悟性が、或る何らかの時間契機において、実践する瞬間的切断 *la coupe instantnée* のせいで構成される」(EC, 250, cf. 313, 317, *etc.*)。「生成の切断」である。そうやって構成された「様々な切断面 *des coupes*」が外部性にほかならない。内面の「物質の秩序」の「裏面 *l'envers*」(EC, 241)である。「数学の秩序」ないし「幾何学の秩序」という空間へと向かう「物質の秩序」、「張り緩み」である⁽²⁸⁾。かくして、身体性とは「形態」へと向かうそうした身構えにおける運動を意味している。内面の領野におけるかぎりでの外部化という方向の運動であり、流れである。帰するところ、「直観の哲学」といえども、「身体^{いのち}の生を、それが実在する本体として *réellement* 在る場において、精神の生^{いのち}に通じる途上で観る」(EC, 269)ことがなければ、すなわち、第二階梯において「張り^し緊め」と交流している「張り緩み」たる身体性を無視するなら唯心説に留まる。これに対して物質存在たるかぎりでの「形態」とは、「物質性」たる「阻止」の外部化であり、空間化である。生^{いのち}とは「それが阻止されるだけで物質を創造する過程」のことである (EC, 246)。いっそう精確に言うなら「形態」

とは原一知性が認識するはずの「物質性」のその「裏面」である。ここでも、認識機能と存在との間に捻じれが生じている。内面の生成における「物質性」という〈否定の秩序〉は、物質存在の「形態」の場たる——仮象的かつ否定的な——外部性として現れる。そして、こうした外部の「形態」を起点にとれば、今度は、二層構造となつて存在論上の「思い込み」が発生する。しかし逆にその意味では、「形態」たる仮象が成立しているということそのことが、原一知性の存在を明かしてもいる。「生成一般」の発生の基には、内面の「生成」がある。「形態」は内面の原一知性の存在論的な残滓なのである。原一知性の認識していた時間的な内面の「物質性」が、一方では現在のわれわれの「張り緩み」と成り、他方ではその結果たる「物質性」の「裏面」たる「形態」と成った。そうやって、知性の対象たる空間的な外部の物質——空間と諸事物——と成ったのである。「物質の生成」である(引用A)。かくしてわれわれも、『創造的進化』の第四章第二パートの末尾をもって小論の結びにすることが出来る。

「運動する本体の実在性とともに前進せんとするなら、他ならぬ当の本体、実在性^{う、ち}のうちに、自らを置き戻さなければならない。変化のうちに定位したまえ。あなたは同時に、変化それ自体をも、また継起する諸状態をも把握することだろう。変化それ自体のほうは、いかなる瞬間も、継起的な諸状態に不動化^うしうる。これに対して、外側から、もはや潜勢的ではなく現実的^うな幾つもの不動だと認知されたそうした継起する諸状態をもって、あなたが運動を再構成することは永久にない。そうした諸状態を、場合にに応じて、性質、形態、態度ないし意図^うと呼びたまえ……」(EC, 307)

哲学は一度は内面へと、「本体の実在性」へと帰還しなければならない。

付記 紙数の都合で註はすべて割愛したが、註番号は残した。註は個人的にお配りしたい。

ベルクソン『創造的進化』終局部分における「二種の思い込み」批判と「否定」の捻じれ 宮崎 隆